「隠れた神」と人間の認識
―パスカルの『パンセ』を中心として―

道 躰 滋 穂 子

キーワード：イザヤの預言、ニコラウス・クザーヌス、十字架のヨハネ、
「明るさ」と「暗さ」、「探せよ、さらば見出さん」、
神の恩寵と人間の意志

・「隠れた神」の思想的源泉

イザヤは預言する、《真(まこと)に汝は隠れた神（*Deus absconditus*）なり》（イザヤ、45・15）と。この預言はその後、キリスト教の伝統によって培われ、さまざまな展開を見せる。たとえば、ドイツのキリスト教哲学者ニコラウス・クザーヌス（Nicolalus Cusanus, 1400c~1406）、スペインのキリスト教神秘家十字架のヨハネ（Joannes a Cruce, 1542~1591）、あるいはユダヤ系宗教哲学者マルティン・ブーバー（Martin Buber, 1878~1965）などの思想において。そしてフランスの思想家ブレーズ・パスカル（Blaise Pascal, 1623~62）においてはとりわけ重要な概念として独自の展開をみせる。

それらの共通の源泉であるイザヤの預言自体は純粋に救済史的観点しか含んでいない。イザヤは預言する。将来、異教徒たちはイスラエル民族の幸福を目撃し、そこにエホバの御業を感知するであろう、そしてイスラエルの指導者の前でひれ伏し、叫ぶであろう、《真(まこと)に神は汝の中にいませり。ほかに神なし、一人もなし。救いを施し給うイスラエルの神よ、真(まこと)に汝は隠れたる神なり。偶像を造りたる者は（…）慌てて退かん。されどイスラエルはエホバの神に救われて、永遠の救いを得ん》と。

・クザーヌスと「隠れた神」

クザーヌスにとって、神とはいわば人間の手をすり抜け、あらゆる名辞のかなたに存在するものである。したがって「隠れた神（*Deus absconditus*）」は神の存在に関する不可知論的表現であるか、もしくは「神の実在に関する形而上学的無知」を示す表現となる。[1] それを示す一例を挙げる。クザーヌスと異教徒との対話の一部である。

《異教徒：あなたの崇拝する神とはどのようなお方なのか。――クザーヌス：私は知っておりません。（…）――異教徒：あなたが拝んでおられる神についてあなたは何を知っておられるのか。お答えください。――クザーヌス：私の知っているすべてのものは神

ではないということ、そして私が概念するもののすべては彼に類似していないということ（…）――異教徒：それゆえ神は世の知恵者のすべての目から隠れて永遠に賛美されますように。》[2]

クザーヌスとって、「真の知恵」とは、かのソクラテスと同様に、「おのれの無知を知っていること」である。これはとくに人間と「本質」を異にした「神」に関して適用されねばならない。それゆえ、神に関する「知」は「否定神学的」なものでしかあり得ない。すなわち、人間が「知っているすべてのもの」は「神にあらず」ということ、人間が「概念するもののすべて」は「神に類似せぬ」ということである。しかし、クザーヌスは「神」を「知らないがゆえに拝む」のである。なぜなら、クザーヌスにとっては、「おのれが知っていると思っているもの（*id quod se scire putat*）へと動かされる」のは「おのれの知らぬもの（*id quod ignorant*）へ動かされる」より一層奇妙なこと、理解不能のことだからである。

・十字架のヨハネと「隠れた神」

十字架のヨハネにおいては、神は究極的に人間の《魂（alma)》が一致すべき対象であるが、神はいかなる意味においても《被造物（criaturas)》にあらずという認識が根本にある。なぜなら被造物とは《何らかの限定された様式および様態のもとで表象》されるところの《何らかの形式あるもの》であるが、[3] 神の叡智は《完全、純粋、かつ単純》であるので、《いかなる様式も様態も存在しない》だけでなく、《いかなる限定にも、いかなる判明で個別的な知解のもとにも、入ってこない》ものだからである。しかし「神」は全被造物を「愛」をもって創造し、主宰している包括者でもある。[4] それゆえ「魂」は被造物と神との間に横たわる絶大な《距離》を、神の愛をもって、超えていくほかはない。[5]

十字架のヨハネの『愛の賛歌』は《どこへお隠れになったのですか。愛する方よ》という花嫁（＝人間の魂）の花婿（＝神）の不在を嘆く声で始まる。「魂」と「神＝イエス・キリスト」との距離が無限であることの暗示である。「魂」は、いったんは接触し「傷」を負わせながら、そのまま逃げ去った「神」を探しに出かける。しかしそれは《神の神的本体の顕現を願うに等しい》。[6]「神の御子の隠れ場」とは他ならぬ「御父のふところ」（ヨハネ、Ｉ・18)、言い換えれば「神の実体」そのものだからである。

しかし、十字架のヨハネは「イザヤ」の言葉を解して、神は人間の目から、また悟性かも「隠れている」としている。それゆえ、いかに素晴らしい神との交流を持とうとも、また神についてのいかに崇高な認識を抱懐しようとも、「神の本質」を理解したことにはならない。「魂」は常に「どこにお隠れになったのですか」と問いつつ、「神の隠れ家」に神を探し求めねばならないのである。

さらに「伝道の書」(9･1）には《人は誰も、愛に値するか憎しみに値するかを知らない》とある。ならば、たとえ「魂」が神と霊的交感を体験したとしても、「魂」には恩寵が賦与されたと信ずべき根拠はないが、反対に、神との霊的交感を欠き「暗黒」状態にある「魂」

でも、神を所有していないと考えてはならない。[7]

したがって、十字架のヨハネが求めるのは、神との単なる情感的交流ではない。「神の実体」の「明らかな現前と直視」であり、いわば「栄光の中で与えられるあの確実性と喜び」である。[8] なぜなら人生の短さ、永遠の生への道の狭さ、現世的財宝の空しさ、義人の救霊の辛苦を既に悟っている「魂」は、[9] いわば「すべての被造物からもおのれ自身からも離れてしまった魂」だからである。

そのような「魂」は神を那辺に探し求めるべきか。十字架のヨハネは言う、「神の御子なる御言葉は、御父および聖霊とともに、魂の最奥に、本質により、現存により、隠れ住んでおられる」と。その典拠は《御身は私の内におられた。にもかかわらず、私は誤って外部に御身を探し求めていた》[10] というアウグスティヌスの言葉であり、また、「神の国は実にあなたがたのうちにある」（ルカ、17・21）とのイエス・キリストの言葉である。つまり、神は「魂のうちに隠れている」のである。「善き観想者」はそれを信じて《愛をこめてそこに神を探さねばならない。》[11] 言い換えれば、神が「隠れ場」は「魂」の深奥であるので、「魂」は「愛」と結合して「おのれ自身の内部への大いなる観想に入らねばならない。」[12]

したがって、十字架のヨハネにとっては、神はいわば「その本質に由来する欲求によって隠れている」のである。しかも俗的なものやおのれ自身からも離れてしまった「魂」に対してさえも「隠れている」のである。いわば「神を隠している」のは「神の超越性」である。[13] ならば、「魂」に「神を求めさせる愛」は「全明証性、全感覚のかなたにある本質」にまで、「魂」を引き上げるものに他ならない。したがって、「魂」は「愛」に導かれて、「瞑想・克己の道」すなわち《観想の道》を経て、《霊的婚約の段階》すなわち「一致の道」へと至る。[14] この最終段階に入ると《神性と人性の間に得も言われぬ交流が生じる》。《神性も人性もその本質を変えることなく、しかもおのおのが神であるように見える》「一致」である。[15] この一致によって「魂」はいわば《すべての花の完全性と美とを一身に集めた花》となる。[16] それは「愛の糸」が神と「魂」を強くとらえて「結合させる」ために生じるのであり、両者は《変容して愛による一致をなし、かくて実体においては（en sustancia）異なるものの、その栄光と相貌においては、魂は神であるかのように見え、神は魂であるかのように見える》ことになる。[17]「魂」はこの「言語に絶する」かのような一致に至るまで憩うことはない。十字架のヨハネにとって、「隠れた神」は神秘主義の「道しるべ」であるとともに、その帰結となる原理であるといわれる所以である。[18]

・パスカルと「隠れた神」

パスカルにおいては「隠れた神」は前二者とは異なる思考のもとに展開される。クザーヌスにおいても、十字架のヨハネにおいても、たとえ人間が無辜の状態であろうとも、あるいはいかに高められた状態であろうとも「神は隠れている」。

前者にとっては、人間の「真の知恵」は「無知の知」にあるので、神は「不可知」である。その意味で神は隠れている。確かに、パスカルの思想全体に幾分かクザーヌス的思考を見ることは不可能でないが、[19] パスカルの「隠れた神」の思想に不可知論的要素はない。

一方、十字架のヨハネにとっては、パスカルが強調するような、神と人間を隔てた原因としての「アダムの失墜」は重大な意味をもたない。被造物たる人間の本来的「本質」と神のそれの絶対的相違が、人間から神を隠しているのである。いわば神はその「本質」に由来する要求によって「隠れている」。しかし本来的な「本質」の相違にも関わらず「神秘的」体験によって、人間は神と結合し得るのである。確かに、パスカルが一時期居住していたルーアンでは、十字架のヨハネを含むスペインの神秘主義思想が広く知られていただけでなく、ポール・ロワイヤル修道院もそれに関心を寄せ、アヴィラのテレジアの翻訳を企てていたという事実はある。[20] しかし、パスカルが公表する目的で書かれた著作には「神秘主義的色彩をもつ主張は皆無である。」[21]

パスカルは『パンセ』において、しばしば《*Vere tu es deus absconditus*：御身は真(まこと)に隠れた神なり》を引用する。[22] しかしパスカルによれば、神は絶対的に隠れているわけでもなければ、《不在》(B.559) でもない。《神は時折現れる》(B.559)。イエス・キリストを通してみずからを現したからである。ならば《神は常に存在する》(B.559 bis) と言える。既述のように、キリスト教にとって「神」の「本質」は《永遠の存在》(B.559 bis) である。《永遠の存在》であれば《一度、存在するなら常に存在する》(B.559 bis) ということ、まして《一度現れるなら常に存在する》(B.559) ということは整合性をもつからである。したがって、神は「隠れている」のではない。神はいわば《部分的に隠され (caché)、部分的に露(あら)わ (découvert) なのである》(B.586)。すなわち神は常に顕現しているのだが、或る者は「見出し」、他の者は「見出さない」のである。しかし「隠れた神」と呼ばれるなら、神は確かに《隠れることを望んだ》(B.585) のである。つまり「意志」によって「見出されぬ」ようにしているのである。[23]

・「隠れた神」と人間の「堕落と救済」

したがって、パスカルが「隠れた神」というテーマで示したいのは、なぜ神は或る者には《完全に認識可能となることを望んだ》(B.430) のか、そして神はなぜ他の者には「認識されぬ」ことを「望んだ」のかということである。

パスカルによれば、その理由は人間に自身の《堕落》と《贖い》という《二つの真理》を《教える》(B.556) ために他ならない。すなわち《人間の本性の堕落以来、神は人間を盲目 (aveuglement) のうちに置いて (laisser) おいたが、そこから脱出し得るのは、イエス・キリストによってのみである》(B.242) ということを示すためである。

言い換えれば、神が《隠れることを望んだ》(B.585) 理由は、万人が「原罪」による《堕落 (corruption)》によって《神に値せぬ (indigne)》(B.559；B.557) ものとなった

ことを「教示する」ためであり、神が「現れることを望んだ」は、人間が《イエス・キリストによって贖われていること》(B.560)、そして《地上には》それについての《素晴らしい諸証拠》があることを「教示する」ためである。また、神に関して《不明瞭性（＝暗さ：obscurité)》(B.586）がなかったら、人間は《おのれの堕落を感じないであろう》し、神を照らし出す《光（lumière)》がなかったら、人間は《救済策（remède）を希望しないであろう》からでもある。言い換えれば、人間が《堕落》によって《神にまったく値せぬ（indigne)》者となったことを悟らせるために神は「隠れる」のであるが、人間の《最初の本性》――つまり神によって創造された時の人間の「本性」――は《神を受容可能(capable)》(B.557）であったこと、そして神はそれを回復させるため、人間が《受ける資格のない憐憫》によって、人間を《贖う》こと、そして《救いを開く》ことを《望んだ》(B.430）ことを知らせるために、神は《露わ（découvert)》(B.586）となるのである。

しかし、「堕落からの救出」すなわち「救い」は、人間の「意志」を無視した神からの一方的な行為ではない。パスカルはイエス・キリストに語らせる、《私は汝の信心(créance)を理由なく（sans raison)、私に従わせることを欲しないし、汝を圧制的に服従させることも欲しない》(B.430）と。すなわち《正当なことに、神は、或る者には、憐憫――これは彼らも受ける資格などないのだが――によって与えるものを、他の者には、彼らの頑固さゆえに、拒絶するのである》(B.430)。それゆえ神は、「救いを望む」者、すなわち《真摯に神を探すであろう者》や《全心（tout leur cœur）で神を探している者》には、《救いを開こう》と《望み》(B.430)、その者には《露わに現れる（paraître à découvert)》ことを《望んだ》。そしてその者には《完全に認識可能となる》(B.430）ために《顕現する》(B.557)。反対に《神を試みる（tenter）者》(B.557）や《全心で神を避ける者》(B.430）は「認識できぬ」ように神は《隠れる》ことを望んだのである。謂わば神は人間の「望み」に応じるために、神についての《認識を調整した》(B.430）のである。

・イエス・キリストと「隠れた神」

周知のように、神は人間を「贖う」ことを望み、イエス・キリストとなって地上に現れたが、パスカルによれば、《真に隠れた神》(B.751）として現れたのである。なぜなら、第一に、《人間性でみずからを隠した》[24] からである。神は《神自身を現さず》(B.430)、「人間」という卑近な姿で現れたからである。いわば、神は《「受肉」までは、神を覆う自然のヴェールのもとで隠れたままでおられた》が、《現れねばならなかったとき、さらにもっと隠れられた》[25] のである。第二に、《神は可視的となったときよりは、不可視的であったときのほうが、識別可能であった》[26] とさえ言えるほど、イエス・キリストの「生涯」や「行為」には「曖昧な」ところがあった。多くの者が《この人がそれ［＝メシア］であるとは考えないであろう》(B.751）ほどに《混沌とした（confus)》部分があり、多くの者から《無視される》(B.751）ほどであった。それは神が「神を試す者」から「隠れる」

ため、言い換えれば、この種の者を「神性」に対して、《盲目にする（aveugler)》(B.795) ために他ならない。そしてパスカルによれば、それが「神の意図」であることは預言者たちの言が証している。

《預言者たちはイエス・キリストについてなんと言っているか。彼は明白に神であろうと？否、むしろ彼は真（まこと）に隠れた神である、と。そして彼は無視されるだろう、そして人はこれがそれであるとは考えないであろう、彼は多くの者が躓く「躓き（achoppement）の石」となろう、等々、と。(…) しかし、と人は言う、曖昧さ（＝暗さ）があり、そしてそれがなかったら、人はイエス・キリストに突き当たりはしなかったろう、と。これは預言者たちの断固とした意図のひとつなのである。(…)》(B.751)

もしイエス・キリストが万人を《盲目にするためにのみ来臨した》のなら、《そのすべての行為は漠然としていたであろうし、不信仰者を説得するいかなる手段ももたなかっただろう》(B.795)。しかしイエス・キリストは神を「探す者」には《おのれのうちにある神的な諸印し（des marques divines）を説得力のある証拠によって見せたい》(B.430) と望んだのである。その「神的な諸印し」はイエス・キリストが《何であるかを納得させ》、《拒むことのできない不思議や証拠によって》、イエス・キリストに《権威を与える》。そのことによってイエス・キリストは人間が《信じることを欲する》(B.430) のである。

それゆえ、「全心で神を探す者」はイエス・キリストの「曖昧な漠部分」にも「神的な諸印し」を見出して、神と認識したのである。つまり、イエス・キリストは《真の隠れた神》であるとは、「全心で探す者」には《聖なる避けどころ》であり、「避ける者」には《躓きの石》(B.795)（Cf. イザヤ、8・14）の謂いである。

確かに、神は全能者である。《最も頑迷な者どもの頑固さ（obstination）を打破せんと望んだのであれば、彼らが神の本質の真理を疑い得なかったほど明白に顕現する（se découvrir）ことによってそれをなす》(B.430) ことはいとも容易いことだったろう。しかしその現れ方は《あたうる限りの明白性をもっておのれを明示する（se manifester)》(B.557) ようなものではなかった。《真摯に神を探すであろう者から認識され得ないほど隠れたやり方》でもなく、また《明らかに神的で万人を絶対的に説得し得るようなやり方》(B.430) でもなかった。神は《その来臨において》《その種のやり方で現れようと望まなかった》(B.430)。人間の「意志」のあり方に応じて、「全心で探す者」は「見出す」が、「神を避ける者」は「見出さない」という《温和（douceur)》なやり方を採ったのである。

然るに、イエス・キリストに直接、遭遇しながら、その神性に対して「盲目」であった者、言い換えれば「真理」に対して「盲目」であった者とは、端的には、当時の「ユダヤ教徒」である。その原因は彼らが何十世紀も死守してきた『旧約聖書』が「象徴」に満ちて曖昧に書かれていたからあり、また彼らが《神から受け取った》のは常に《可視的な幸福（les biens visibles)》であったためである。そのため彼らは「真理」も「可視的なもの」と誤解し「不可視的な真理」を見つけ得なかったのである。しかし『旧約聖書』のなかに「隠されていた」《真理》(B.675) は、のちに出現したキリスト者たちによって、あ

たかも彼らに《認識されることになっていた》かのように、正しく認識された。なぜなら、キリスト者は、前者が受け取っていた《可視的な幸福》のなかに《非常に偉大で常に神的な》力を看取していたので、神はその神的な絶大な力によって、《不可視的なもの（les invisibles）とメシアとを与える力がある》(B.675）ことをも看取したからである。つまり『旧約聖書』もまた、《或る者たちを盲目にし、他の者たちを照明するために造られた》(B.675）と断じることができる。これも「隠れた神」の変奏である。

ユダヤ教徒に関するパスカルの前掲の主張には、確かにアウグスティヌスの影響がある。しかし、パスカルが明確にしない「盲目」と「滅び」の関係を、アウグスティヌスは明確に関係づけている。その一節を引く。

《十字架につけられる人［＝イエス・キリスト］は、十字架につける人々［＝ユダヤ教徒］を盲目にした（excaecare）のだ。(…）あなたたち［＝後者］は滅ぼそうとの企てを実現し、かの人［＝前者］は盲目にしようという企てと、救おうという企てを実現し、また高慢な者を盲目にし、謙虚な者を救おうという企てを実現したのである。(…)》[27]

・「世界」と「隠れた神」

パスカルによれば、神が《部分的に隠されており、部分的に露（あら）わである》(B.586）という事実は、神の創造である《世界（le monde)》(B.556）にも妥当する。仮に《世界の存続》の理由がひたすら《人間に神を教える》ことにあるとすれば、《神の神性は抵抗不能のやり方でその全部分に輝いていることであろう》(B.556)。ところが「世界」では《万事が神を顕示しているということも真ではなく、万事が神を隠しているということも真ではない》(B.557)。そこに《現われているもの（ce qui y paraît)》は《神性の全き排除でもなければ、明瞭な現前でもない》(B.556)。いわば《おのれを隠している神の現前（la presence d’un Dieu qui se cache)》[28] である。それゆえ《世界》もまた人間に《おのれの堕落とおのれの贖い》という《二つの真理》を《教え》かつ《証明》(B.556）するために、言い換えれば《神の憐憫と審判を実施する》(B.584）ために《存続する》(B.556)。それは《世界》が《イエス・キリストよって、イエス・キリストのためにのみ、存続している》(B.556）ことと同義である。

したがって、パスカルの「隠れた神」の思想は形而上学的思考の産物ではない。また、イザヤの預言に起源をもつが、その展開は、その源泉から逸脱している。というよりは完全に変形されている。パスカルにとっての「隠れた神」は、人間の「原罪」による「堕落」を示すと同時に、イエス・キリストの「贖い」による人間の「救済」を示すきわめて独自の概念である。

・「明るさ」と「暗さ」

一方、神は《神を探す者には神についての可視的な諸印し（des marques de soi visibles）を与え、探さぬ者には与えないよう、神についての認識を調整した》（B.430）という記述の後に、《見ることのみを欲する者のために十分な光（lumière）があり、反対の意向（disposition）を持つ者には十分な暗さ（obscurité）がある》[29]（B.430）と記されている。ならば、「神性の諸印し」もまた時折「隠れる」わけではない。それらは「常に存在する」のである。しかし「見ることのみを欲する者」すなわち「神を探す者」には「光」が与えられ、それに《照らされて》（B.566）それらを「見出す」が、「反対の意向を持つ者」すなわち「神を探さぬ者」には「暗さ」が支配し、それらを「見出さぬ」ということになる。これもまた「神の意志」である。別の断章に《神が或る者を盲目にすることを望み、他の者を照らす（éclairer）ことを望んだということを原理としないなら、神の御業については何も理解できない》[30]（B.566）と記されているからである。

斯くのごとき陳述は確かに、所謂「救霊予定説」を想起させる。パスカルの「隠れた神」の観念は「救霊予定説」と「共存している」といわれる所以である。[31] しかし「暗さ（＝曖昧さ）」と「光」に関しては別の主張がある。《暗さが皆無だったら、人間はおのれの堕落を感じないだろう。光が皆無だったら、人間は治療薬（remède）を少しも望まぬであろう》（B.586）と。また「明るさ」と「暗さ（＝曖昧さ）」を対比した他の主張がある。

> 《(…) 選ばれた者（les élus）を照明するに十分な明るさ（clarté）があり、そしてその者を謙らせるに十分な暗さ（＝曖昧さ：obscurité）がある。排斥された者（les réprouvés）を盲目にするに十分な暗さがあり、そしてその人々を罪に定め（condamner）、言い逃れ不能にするに十分な明るさがある。(…)》[32]（B.578）

文中の《選ばれた者》や《排斥された者》という語は、確かに「救霊予定説」に結びつく。しかし全体的には偏狭な「救霊予定説」では理解不能な言説でもある。《選ばれた者》にも《排斥された者》にも平等に《明るさ》と《暗さ》があると言明されているからである。同様の主張は他にもある。神は《恩寵》によって《神の敵［＝不信仰者］》に対しても《十分な光を与えている》（B.584）と。それは彼らが《神を探すことを望み神に従うことを望むなら戻るための十分の光》であり、同時に《神を探すことを拒むか神に従うことを拒むなら罰する（punir）ための十分な光》（B.584）である、と。

蓋し、これらの言説は「予定説」とは異なる解釈を許容する。神は万人に同等の「光」を提供している。しかし「おのれの堕落を感じる」者は「神を探す」ことを望み「見ることのみを欲する」ので、その「光」から「十分な明るさ」を得て、「堕落の治療薬」たるイエス・キリストを「見出す」。その結果、神に「戻る」。しかし「おのれの堕落を感じぬ者」は「神を探すことを拒む」ため、同じ「光」にも「暗さ」を感じて「盲目」状態になり、神を「見出さない」。

この仮説が正しいなら、前掲の「排斥された者」とは、神の「予定」によって当初から

「排斥されている」わけではない。この者も「恩寵」により「光」を与えられているが、「探す」ことを欲しないがゆえに、その「光」にも「明るさ」でなく「暗さ」を感じ、神を「見出さない」のである。この者は「怠惰」の「罪に定められて」当然であり、「罰」として救霊から「排斥される」。これと対比するなら、「神を探す」ことを望み「見ることのみを欲する」者は、いわば神に《選ばれた者》[33]である。神に「戻る」ことによって「堕落」から救われるからである。しかしこの者にも「排斥された者」と同じ「暗さ」が用意されている。おのれを「選ばれた者」とみなして「高慢」に陥らぬようにするためである。[34] したがって《神の憐憫を頼んで善行をなさずに放逸に過ごす者》に対しては、パスカルは《神には憐憫があるからこそ、あらゆる種類の努力をせねばならない》(B.497) と言うのである。

一方、「選ばれた者」と「それ以外の者」に関する別の記述がある。

《選ばれた者 (les élus) にとっては、万事が良いほうに回転する――聖書の諸々の曖昧さ (= 暗さ : obscurité) に至るまで。この者は神的な諸明瞭さ (clarté) のゆえにそれらを尊ぶからである。そして他の者にとっては、万事が悪いほうに回転する――諸明瞭さに至るまで。なぜならこの者はおのれが理解しない曖昧さのゆえに、明瞭さを冒瀆するからである。》[35] (B.575)

この文を補完するかのようなアウグスティヌスの一文――パスカルの前掲の主張《見ることのみを欲している者のためには十分な光があり、反対の意向を持つものには十分な暗さがある》[36] (B.430) にも影響を与えたといわれる――がある。「聖書」に象徴的で曖昧な記述があることに関してアウグスティヌスは言う。

《(…) 聖書のなかの暗さは明瞭であるものによって解決され説明される。そして、もし理解しやすい何ものもなかったなら、人は真理を探求するための強い熱意ももたないであろうし、真理を見出す快楽ももたないであろう。聖なる書のなかに諸印しと象徴がなかったら、またこれらの象徴のなかに真理の諸印しと跡がなかったら、我々は我々がそれから引き出す諸々の認識によっておのれの活動を調節し得ないだろう。》[37]

これを基にすれば、前掲のパスカルの主張は次のように解釈し得る。「真理を探求するための強い熱意」の持主は、聖書における象徴に満ちた曖昧な記述――謂わば「聖書」においても「真理」は「隠れている」――にも「神的な諸明瞭」を「見出」し「真理を見出す快楽」を知る。それゆえ、聖書の他の曖昧な個所をも「尊び」、それにも「真理を探求する強い熱意」を抱く。その結果、そこにも「真理」を「見出す」。パスカルの表現を用いれば、この者には「選ばれた者」であるかのように、「万事が良いほうに回転する」のである。「他の者」すなわち「探さぬ者」には「万事が悪いほうに回転する」。「真理を探求するための強い熱意」を抱かぬので、聖書に「曖昧さ」しか見出さず「真理を見出す快楽」を味わえない。その結果、聖書の「明瞭な記述」をも「冒瀆」する。

この解釈が正しいなら、「選ばれる者」であるか「排斥される者」であるかは、「全心で真理を探す」か否か、つまり「真理を探求するための強い熱意」の持主であるか否かに懸かっていることになる。

・「探す」ことと「神の恩寵」

「全心で探す者」あるいは「見ることのみを欲している者」は「見出す」。これは「隠れた神」のテーマにおけるパスカルの基本的主張である。論拠は言うまでもなく「福音書」の《探せよ、さらば見出さん(Cherchez, et vous trouverez; frappez, et on vous ouvrira)[38]》(マタイ、7・7）という聖句である。これは同じ「福音書」のなかの《幸いなるかな、心の清いもの。その人は神を見ん(Magnifiques les cœurs purs, car ils verront Dieu)[39]》(マタイ、5・8）という聖句をもとに、パスカルが《心の清められた者（ceux dont le cœur est purifié）にのみ、神は顕現する（se découvrir)》(B.737）と主張していることにも表れている。もちろん、「見出す」といっても可感的に「見出す」わけではない。アウグスティヌスによれば、聖書に《いまだ神を見し者あらず》(ヨハネ、第一書、4・12）と記されているように、「神の「本質（*res*)」は「不可視的」である。したがって《探せよ、さらば見出さん》という聖句は、直接的に《目（*ocuim*)》で《探す》ことを奨励しているのではない。《心（*corde*)》で《探す》ことを奨励しているのである。それゆえ《目によってではなく心によって探し求めるべき》[40] なのである。

しかし、周知のように、アウグスティヌスの厳格な恩寵論によれば、原罪後の人間は「神の恩寵」なしにはいかなる「善」も「欲する」ことはない。ならば「神を探す」こと、それを「欲する」という「善行」も人間の意志からは生じない。それゆえアウグスティヌスは、《求めよ、さらば与えられん。探せよ、さらば見出さん。叩けよ、さらば開かれん》という聖句に独自の解釈を施す、《われわれが［与えられて］受け取りたいと欲するものすべてを、われわれに求めさせるのも神であり、われわれが見出したいと欲するものを探させるのも神であり、われわれに［門を］叩かせるのも神である》[41] と。しかも「善を欲する恩寵」が与えられるか否かは、天地創造以前に神によって定められている。つまり「予定」されているのである。[42] アウグスティヌスは「ユダヤ教徒」に言及するときそれを鮮明にする。

> 《彼ら［＝ユダヤ人］は預言者イザヤの預言のゆえに信じることはできなかった。(…)ところで、なぜ彼らが［信じることが］できなかったのかと問われたら、即座に答えよう。「欲しなかった」からだ、と。神は彼らの悪しき意志を予見した（*malam quippe eorum voluntatem praevidit Deus*）からだ、と。そして神には未来の事柄が隠されることなど、到底あり得ぬことなので、神は預言者をとおして預言しておいたのである。(…)「神は彼らに、眠れる心、見えぬ目、聞こえぬ耳を与え給えり」そして「彼らの目を盲目にし、心を固くした」(ロマ書、11・7～8；イザヤ、6・10）と。(…）すなわち、神は見捨て、助けを差し出さないことによって（*deserendo et non audiant*)、盲目にし、心を固くさせる。神はこれを隠れた審判によってなしうるのである。》[43]

ここには所謂「功徳予見後説（*poste praevisa merita*)」が垣間見られる。神は「悪しき意志」を「予見した」人間には、「善」を「欲する」ことのないように、予め定めたという説である。

同義の主張はパスカルの『パンセ』にも確かに存在する。前掲のように、神は《真摯に神を探すであろう者》(B.430) には《救いを開こう》と《望み》、その者には《露わに現れる (paraître à découvert)》(B.430) ことを《望んだ》のである。このような主張に「功徳予見後説」を見ることは不可能ではない。神は「探すであろう者」を予見しその者に「探す恩寵」を「与える」という解釈も可能だからである。

また、《*Petenti dabitur* (求める者は与えられるだろう)》という聖句に基づいて《求める (demander)》ことは人間の《能力のうちにある》と主張する者に反駁して、パスカルは《それはそこ［＝人間の能力］にはない、なぜなら、得ること (obtnir) ことはそこにあるが、祈りは (prière) そこにないからだ》(B.514) と記している。「求める」なら「得る」ことは確かだが、「求める」ための「祈り」――「求めさせてほしいと祈ること」――は「人間の能力のうちにない」の謂いである。これをより明確に示すのは、《神はなぜ祈りを設けたか》と題する対話形式の記述 (B.513) である。神は《第一位 (la première) を保つために、御旨に適う者に祈りを与える》(B.513)。それゆえ、神は《祈りに対して義を与えることを約束されたが、約束の子等にしか祈りを約束されなかった》と記されている。さらには、《神は精神より意志をなびかせる (disposer) ことを望む。完全な明るさは精神には役立つであろうが、意志を害するであろう》(B.581) という一節も、「神の意志は人間の意志に先行する」との謂いであると解することも不可能ではない。

しかし、既述のように、『パンセ』には「救霊予定説」を揺るがすような主張も少なくない。例えば、既に指摘したように、前掲の《選ばれた者を照明するに十分な明るさがあり、そしてその者を謙らせるに十分な暗さがある。排斥された者を盲目にするに十分な暗さがあり、そしてその人々を罪に定め、言い逃れ不能にするに十分な明るさがある》(B.578) という文や、神は「不信仰者」に対しても《恩寵によって十分の光を与えている》(B.584) が、その「光」は《神を探すことを望み神に従うことを望むなら戻るために十分な光》であると同時に、《神を探すことを拒むか神に従うことを拒むなら罰するための十分な光》であるという言説は、「救霊」への過程に人間の「自由意志」の関与を許すものに思われる。さらに、《かくも多くの人間が神の寛大さに値せぬものとなっているので、神は彼らの望まない善は欠如のままに彼らを置いておく (laisser) ことを望んだ》(B.430) という言説は、人間の「善の欠如」の原因は人間が「善を望まぬ」ことにあることを示唆している。

パスカルはイエス・キリストを否認した「ユダヤ教徒」に関しても、アウグスティヌスのような明確な予定説を示さない。単に《ユダヤ人》は《イエス・キリストを排斥する (réprouver) であろう》(B.735) こと、《それを理由に神から排斥されるであろう》こと、《神は彼らを盲目に処するだろう》こと、《彼らは盲人のように真昼に手さぐりするだろう》こと等々は、《預言》(B.735) されていたと主張するのみである。

・「教会」と「隠れた神」

既述のように、この《世界》においては《万事が神を顕示しているということも真ではなく、万事が神を隠しているということも真ではない》(B.557)。事情は「教会」においても同じである。神は《真摯に神を探すであろう者》には《おのれを認識させる》ために、《教会のなかに可感的な諸印し（des marques sensibles）を確立した》(B.194）が、一方では《全心から神を探す者にしか感知されない》ように、《それらを覆ってしまった（il les a couvertes)》(B.194）のである。つまり、それらの「真の意味」を隠したのである。

そのような「印し」の一例は、「聖体」の「パン」と「聖血」の「葡萄酒」である。「パン」と「葡萄酒」は《司祭のうちにある》イエス・キリストの《力をとおして》(B.553)、イエス・キリストの「聖体」と「御血」となるが、信徒はそこに神が《輝いている（éclairer)》のを見出して《イエス・キリストを認識する》。[44] しかし《異端者たち》はそれを認識することはない。「パン」と「葡萄酒」の《外見》しか見ず、そこに《別の実体》を《探そうとは考えない》[45] からであり、言い換えれば、「パンと葡萄酒」の《形色》のもとに「隠れている神」を「探さぬ」からである。パスカルは同書簡に記す。

> 《(…）神は最後の到来まで、人間たちと共にとどまるという使徒たちにされた約束を守ることを望まれたとき、神はすべてのなかで最も不思議で最も曖昧な（= 暗い：obscur）秘密のなかにとどまることを選ばれた。「聖体」の形色がそれである。聖ヨハネが「黙示録」で「隠れたマンナ」と呼ぶのはこの秘蹟である；そして私の信じるところでは、イザヤが預言的精神において、「真（まこと）に御身は隠れた神なり」と言ったとき、この状態において神を見ていたのである。これこそ神が存在することのできる最後の秘密である。》[46]

『パンセ』では、イエス・キリスト自身が言明する、《私は汝の現前にある（Je te suis present)。聖書のなかの私の言葉をとおして、教会の中の私の霊をとおして、諸々の霊感（inspiration）をとおして、司祭のなかの私の力をとおして、信者のなかの私の祈りをとおして》(B.553）と。したがって、《神はかくも多く顕現した（Dieu s’est tant découvert)》(B.288）のである――とりわけ「聖書と教会」において。ならば人間はそのことに《感謝すべき》であって、《神が隠れたことに不平を言う》(B.288）べきではないし、《何ものも真理を示してくれぬ》と《喚く》者、すなわちキリスト教を《攻撃する》者は、実際には《真理を探すに怠惰である》ことを《公言しているに過ぎぬ》(B.194）ということになる。真にキリスト教を《攻撃する》ためであれば、《[真理を］得るべくあらゆるところで》とりわけ《教会が供すること》のなかに《探すためのあらゆる努力を行なった》が《何の満足も得られなかった》(B.194）と言わねばならない。

・「探す」ことと「人間の意志」

しかし、このような「攻撃」に対するパスカルの反論には、やはり偏狭な救霊予定説を凌駕するものがある。パスカルは断固として《断言する》からである。これまで《探すためのあらゆる努力を行なった》者で、《何の満足も得られなかった》などと《言い得た者は一人もいない》(B.194) と。また、およそ《理性的な人間 (personne raisonnable)》(B.194) でそう主張し得る者はない、と。また、「キリスト教の偉大さ」を示そうとの意図で書かれた断章には、《もし［この］宗教が、探すことによって、見出し得るようなものであるなら、いったい何に不平を言っているのか？》(B.574) と記されている。「人間の意志」に「探す」能力を認め、「探さぬ者」を咎めていると解釈し得る文章である。

したがって、対話者が《もし神が私に神を崇敬することを望んだのなら、私には神の意志の諸印し (des signes de sa volonté) が残されていただろうに》(B.236) と不平を言うなら、パスカルは《神はそうしたのだ》と断言し、そしてそれが「見出せない」とすれば、《貴君がそれらの印しを無視している (négliger)》からにすぎぬと説き、それらを《探すべし》(B.236) と激励するのである。おそらくパスカルが「護教論」を編もうとした理由がここにある。すなわち《神を認識することも探すこともなく生きる者》に対して《おのれ自身を憐れに思い、光を見出すことがないかどうか試すために数歩でも歩むよう要請せねばならぬ》(B.194) と考えてのことである。それゆえ、「護教論」の冒頭でも[47]《探すことが私には何の役に立つだろう。なにも現れない (rien ne paraît)》(B.247) と喚く対話者に、パスカルは《絶望するな》と答えるのである。

他にも、不信仰者の「意志」を神に向けようと試みるかのような主張がある。《神がわれわれに結びつくなどとは信じがたい》(B.430) と吐露する者に答えてパスカルは言う。確かに、人間はおのれの《低小さ (bassesse)》のゆえに《神の何たるか［＝本質］をほとんど知らない》。また《おのれ自身の状態》を見れば《神はご神の伝達 (communication) を人間に可能にする (capable) ようにはできない》(B.430) と考えるのも無理はない。しかし、人間にはおのれの「低小さ」を基準に《神の慈悲を計量》し、勝手にそれに《限界を設ける》などという《権利はない》し《神がおのれを認識可能で愛され得るものにすることは不可能だと信じる》根拠はない、と。むしろ人間が知るべきは《神は人間に、神を愛し、神を知ること以外の何も求めていない》(B.430) ということである。なぜなら、人間は《おのれが現に存する暗闇のなかにも何らかのものを見ている》し、《地上の諸事物のなかに何らかの愛の種 (たね) (sujet d'amour) を見出している》のであれば、人間は《生来 (naturellement) 愛と認識が可能である (capable)》ように造られているからである。ならば《神がその本質のいくばくかの光線を人間に開示する (découvre) 場合》には、人間は《神が御自らを伝えることを好しとされるやり方で、神を知り神を愛することができぬはずはない》(B.430) と。

そのうえ、パスカルは「キリスト教信徒」として《強いられている》(B.194) ことが

あると告白する。それは《神を認識することも探すこともなく生きる者》に関しても《この世の生にある限り、彼らを照らし得る恩寵を受領し得る（capable）者》であると《見なし》、彼らも《ごく僅かの後にはわれわれがそうである以上に信仰に満たされ得る》と《信じる》ことである。パスカルが《理性的な人》(B.194) に向けて、《[分け前の] 利益によって（par les partis)》、《真理を探究することに心を配らねばならぬ》(B.236) と説くのは、たぶん「分け前としての恩寵の利益から鑑みて」の意味である。

蓋し、パスカルが『パンセ』でイエス・キリストに語らせる有名な言葉――《心を安んじよ（console-toi)。汝が私を見出していなかったら、汝は私を探さぬであろう（tu ne me chercherais pas si tu ne m'avais trouvé）》(B.553) や《汝が私を所有しなかったら、汝は私を探さぬであろう(Tu ne me chercherais pas si tu ne me possédais)。それゆえ、心を騒がせるな（Ne t'inquiète donc pas)》(B.555) などは、《探せよ、さらば見出さん》という聖句に抵触するような言葉ではない。人間は「存在せぬ」と確信しているものを「全心で探す」ことはないからである。「全心で探す」のはその対象が「存在する」ことを知っている（あるいは曾て「見出していた」か「所有している」）が、それがいわば「隠れて」いて「見出せぬ」からである。「見出していた」か「所有している」はずのものが、「隠れている」がゆえに「全心で探す」のである。そしてその対象が「神」である場合、「心を騒がせる」必要はない。「探す」なら必ず「見出す」ことが約束されているからである。

・神が隠れている理由

したがって、パスカルによれば、「神が隠れている」理由は以下のようになる。

第一に、人間の「本性」は背信により、腐敗し、神に相応しくない者になっているが、イエス・キリストによって救済されることを教えるためである。つまり、人間に腐敗とその治療薬の存在を教えるためである。したがって「神が隠れている」こと、そして「その理由を説明せぬ宗教」は《教育的で（instruisant）はない》(B.585)。そしてキリスト教の《神の慈悲》は《神が隠れているときでさえも》、その「光」によって、人間を《有益に (salutairement) 教育するほど大きい》(B.848)。ならば、《神がおのれを顕示するとき》、人間は《どれほどの光を期待すべきであろうか》(B.848)。

第二に、信仰において人間の「自由意志」を尊重するためである。前掲の書簡に言う、《神がこれまで一度もおのれを示さなかったら、信仰はほとんどないだろう》が、《もし神が恒常的に人間におのれを示したなら、神を信じるメリットは全くないだろう》[48] と。神が常に顕現するなら、たぶん人間は神を信じざるを得まいが、《神が時折、現れ、時折隠れる》なら、神を「探すか否か」あるいは「信じるか否か」は、人間の「自由意志」に大きく依存することになる。

第三に、「神が隠れる」のはキリスト教だけが「真の宗教」であることを教唆し、人間が「自由意志」によって「キリスト教」を選ぶためである。『パンセ』に言う。

《もし一つの宗教しかないなら、神はそこでは非常に明白（manifeste）であろう。(…)かくのごとく、神は隠れるので、神が隠れていると主張せぬ宗教はすべて真ではない。そしてその理由を説明せぬ宗教はすべて教育的で（instruisant）はない。われわれの宗教はそのことすべてを行なっている。(…)》(B.585)

註

1. Cf. Phillippe Sellier, *Pascal et la liturgie*, P.U.F., 1966, p.103.
2. ニコラウス・クザーヌス『隠れた神』創文社、1972 年、pp.3 ～ 4, 9 et 16；Cf. P. Sellier, *op.cit*.
3. 十字架のヨハネ『カルメル山登攀』II, 16・7；ドン・ボスコ社、1969 年、p.167.
4. 十字架のヨハネ, *Op. cit*., II, 5・3.
5. 十字架のヨハネ, *Op. cit*., I, 5・1~2, et 鶴岡賀雄「神秘家と詩人」、『宗教研究』日本宗教学会、第 244 号、p.2.
6. Ct. 十字架の聖ヨハネ『霊の賛歌』ドン・ボスコ社、1968 年、p.44.
7. 十字架のヨハネ『霊の賛歌』*op.cit*., p. 45.
8. Henri Gouhier, *Blaise Pascal, Commentaire*, Vrin, 1966, p.199.
9. Ct. 十字架のヨハネ『霊の賛歌』、*op.cit*.,p.41.
10. Augustinus, *Confessiones*, X,27, Œuvres de saint Augustin, EA, 1996, t.14, p.208.
11. 十字架のヨハネ『霊の賛歌』、*op.cit*., p.47.
12. H. Gouhier, *op.cit*., p.199.
13. H. Gouhier, *ibid*.
14. 十字架のヨハネ『霊の賛歌』、*op.cit*., p.225 et 鶴岡、*op.cit*.,p.3.
15. 十字架の聖ヨハネ『霊の賛歌』、*op.cit*., p.227.
16. 十字架のヨハネ『霊の賛歌』、*op.cit*., p.301.
17. 十字架のヨハネ『霊の賛歌』、*ibid*., et 鶴岡, *ibid*.
18. H. Gouhier, *op.cit*., p.199.
19. Cf. F.T.H.Fletcher, *Pascal and the Mystical Tradition*, Oxford, 1954, cit. in P. Sellier, *op.cit*., p.103, n.3.
20. Cf. M.L.Guern, *L'image dans l'œuvre de Pascal*, A.Colin, 1969, p.164.
21. Cf. M.L.Guern, *ibid*. また 同著者によれば、パスカルの全著作において、「隠れた神」のテーマに用いられる「暗さ」という語に、神秘主義の含蓄が感じられるとしても、ただ 1 箇所（すなわち B.582 の後半）にすぎず、しかもそれは書かれた直後に、パスカルによって「欠陥」として退けられているという。なお『パンセ』の断章番号は、*Penseés, Œuvres de Blaise Pascal*, Hachette, Grands Écrivains de la France, XII~XIV に従い、「B.」の記号を前に付す。
22. Cf. B.194；B.242；B.518；B.585.
23. Cf. H. Gouhier, *op.cit*., p.199；et B.Sève, *La question philosophique de l'existence de Dieu*, 2010, P.U.F.,p.99.
24. Pascal, *Lettres à Mlle de Roannez*, 4, Pascal, *Œuvres complètes*, III, DDB, 1991, p.1035-1037.
25. *Ibid*.
26. *Ibid*.
27. Augustinus, *Enarrationes in Psalmos*, 65,10,PL,t.36（PEV, t.11）— Cf. P. Sellier, *Pascal et saint Augustin*, *op.cit*., p.519, n.1：[ ] 内は引用者挿入。

28. 周知のように、パスカルは《自然》なかの《自然的根拠 (raisons naturelles)》(B.556) によって《神の存在》を《証明する》ことを否む。その理由の一つは、パスカルが《世界》に《現われているもの》は《神性の全き排除でもなければ、明瞭な現前でもない》(B.556) とみなしているからである。
29. この主張はパスカルが『真の宗教について (*De la véritable religion*)』(XVII) のなかに見いだし得た観念に、「あらたな活力と悲劇的次元を与え」たものだという。Cf. Pascal, *Œuvres complètes*, Gallimard, 2000, (以下、Pascal, OC, Gallimard と略記)、II, p.1374, n,1, pour fr.139.
30. この断章 (B.566) は発表当時、ジャンセニウスやバイウスの異端的命題を彷彿とさせるものとして、顰蹙をかったといわれている── Cf. G. Truc, *Pascal*, A.Michel, 1949, p.236. 確かに、ジャンセニウスの影響を感じさせる主張である。後者の言説を引く。《あたかも目の上の腫物が目を潰させ、目が暗くされてしまった (*obscurei*) ように、高慢が人間の意志を堕落させたので、同時に暗闇が形成され、人間は盲目となってしまった》(Jansenius, *Discours de la reformation de l'homme intérieur*, cit. in M.L.Guern, *L'image dans l'œuvre de Pascal*, A. Colin, 1969, p.77) として、「アダムの原罪」によって、人類は「罰」として、すべて「暗闇」に落とされ、神を見ることができなくなったことを強調するが、しかし、同時に、「光」という語によって「恩寵」を示していることも事実である── Cf. M.L.Guern, *op.cit*., p.77.
31. Cf. H. Gouhier, *op.cit*., p.195.
32. この断章は、モンテーニュの『エセー』(II、1) で引用されたアウグスティヌスの『神の国』(11 巻 22 章) の一節に着想をえて書かれたものだといわれる。『エセー』の該当箇所を引用する:《われわれにとって何が有益であるかが隠されているということは、われわれの検挙を刺激し、高慢を抑制する》(岩波文庫、III、p.210)。
33. 『パンセ』においては《選ばれた者》という語の用法は様々である。例えば、B.515 を参照。
34. この言説に、所謂「義人の遺棄」の思想を適用することは不可能ではない。すなわち神は義人が神を遺棄することを予見して、義人を遺棄するという説である。
35. この一節については、「ロマ書」(VIII、28) を参照。
36. Pascal, OC, II, Gallimard, 2000, p.1373, n.1, pour fr.139.
37. アウグスティヌスの『真の宗教について』は Antoine Arnauld によって 1647 年に翻訳されている── Cf. Pascal, OC, Gallimard, 2000, II, *ibid*. またパスカルがさらに断章 B.566、B.194、B.557、B.576, 450 等で発展させるこのテーマについては、H. Gouhier, *op.cit*, p.192~200 を参照。
38. *Les Bible, Nouveau Testament*, Pléiade, Gallimard, 1971, p.23.
39. *Op.cit*., p.16.
40. Augustinus, *Tractatus in Epistolam Joannis ad Parthos*, tr.7, n.10, PEV, t,10, p.532; Cf. *Tractatus in Joannis Evangelium*, tr. 58, n.12, PEV, t.10, p. 170;Cf. P. Sellier, *Pascal et saint Augustin*, A. Colin, 1970, p.523, n.8.
41. Pascal, *Écrits sur la grâce, Œuvres complètes de Pascal, nrf de Pléiade, Gallimard, 1954* p.995。この出典は Augustinus, *Enarrationes in Psalm*, 118, XIV, n.2 と思われる─ Cf. P. Sellier, *Pascal et saint Augustin, op.cit*., p.352, n.70.
42. Cf. 拙論「パスカルのアウグスティニズム」「エボーシュ」第 1 号、エボーシュの会 pp.41~43。
43. Augustinus, *Tractatus in Johannis Evangelium*, 53, n.6 ; PEV, t.10,p.166. Cf. P. Sellier, *Pascal et saint Augustin, op.cit*., p.519, n.1.
44. Pascal, *Lettres à Mlle de Roannez*, 4, *op. cit*., p.1035-1037.
45. *Ibid*.
46. *Ibid*.
47. Cf. Blaise Pascal, *Pensées*, Textes éd. du Luxembourg, 1952, p.33.
48. Pascal, *Lettres à Mlle de Roannez, op.cit*.